

第2章 銃後

銃後の暮らし①【北海道・旭川】

お寺の鐘までが鉄砲の弾に

いわたきあきお
岩滝明夫さんのお話から

○支那事変 日中戦争に
対する当時の日本の呼
称。

私が小学生のころ、「支那事変」の最中でした。でもまだ日本はのんびりと平和な感じで、メンコやビー玉、縄とびや石げり、冬はたこあげやスキーをして遊びました。また、「戦争ごっこ」もしました。「戦争ごっこ」と言っても、鉄砲のうち合いのまねをするのではなく、敵のいない戦争ごっこでした。風呂敷を旗に見立てて竹の棒にしばりつけ、それを持って「進め、進め」と…。それが一番おもしろかったです。

十四歳の中学二年生のときにアメリカやイギリスとの戦争が始まりました。日本ははじめは「勝った、勝った」で、どんどん攻めて行きました。今のシンガポール、フィリピンまで日本軍が攻めて勝ちました。しかし、「勝った、勝った」とたくさんの人たちが喜んでいたのとは逆に、私の知人や、大事ないとこのお兄ちゃんや、隣のおじさんが戦死して遺骨になって帰ってきました。義理のお兄ちゃんも戦死して帰ってきました。このようなことが続き、「ああ、戦争ってこのようなものかな」と、実感するようになりました。

戦争になると、兵隊が大変であるのはもちろんのことですが、一般の人にも大変だったのです。いづどこから爆弾が落ちてくるかわかりません。逃げかくれしながら、避難しながら生活しなければなりません。本当に国民、国全体が大変なことになるのが戦争です。

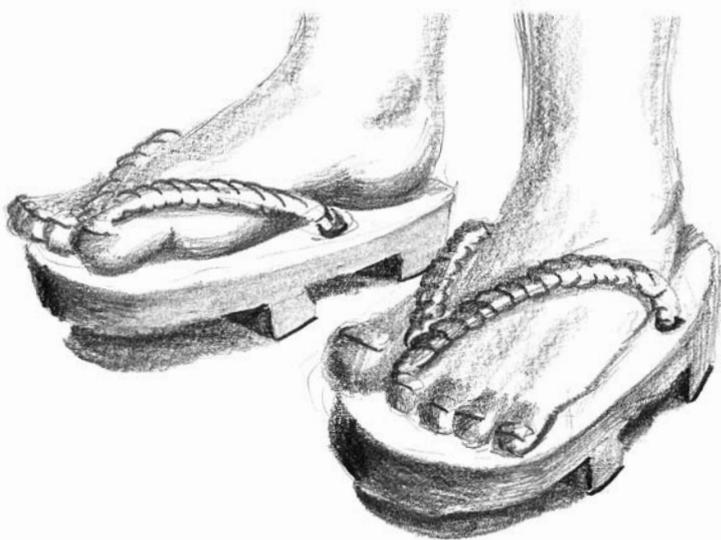
また、戦争はこのように危険な思いをするだけでなく、飛行機や戦車をつくったりと、とてもお金が必要となりました。お金は税金から集められました。ですから、当然物価も高くなりました。

一番働きざかりの人たちが召集しゅうしゅうされました。働き手がいなくなるので、農家などでは働く人が足りなくなりました。畑をつくったり、田んぼをつくったりする人はおじいちゃんとおばあちゃんと子どもだけになってしまいました。また、飛行機や大砲などの兵器や武器ぶきをたくさんつくる必要がありました。そこで、各工場では製品せいひんの生産をやめて、兵器や武器ぶきをつくるようになりました。ですから、食べる物、着る物などがなくなりました。さらに、空襲くうしゅうで家やたくさんのお家財道具かざいは焼けて、住むところもなくなりました。みんなの生活が苦しくなりました。これが戦争の恐ろしさです。

一番苦労したのは鉄がなくなったことです。戦争では弾たまをたくさん使います。弾たまは鉄でできています。大砲を積んだ軍艦ぐんかんも鉄でできています。工場は国の鉄を全部集めて、弾たまをつくったり、大砲たいほうをつくったり、鉄砲てっぽうをつくったり、飛行機をつくったりしました。このために鉄がなくなつたのです。

お寺の鐘かねもなくなりました。鐘かねは鉄砲の弾たまになりました。家にある鍋なべも全部とられてしまいました。鉄がなくなりましたので、かわりに瀬戸物せとものの鍋なべができたのです。

そして、着るものやはき物がなくなりました。それで継ぎつをあてたものを着ていました。私わたくしが子どものときは継ぎつをあてていない服を着ている人はいませんでした。



イメージ図

夏は下駄をはいて学校へ行きました。すり減へってしまい最後にはでこぼこがなくなり板みた
いになってしまします。そして、ふみ割われてしまうとその下駄げたは終わりです。冬は長靴ながぐつをはき
ましたが、穴あながあいたら修繕しゅうぜんをしました。修繕しゅうぜんをしてない靴くつとかいい靴くつを持っている人は、
袋ふくろに入れて教室まで持っていきます。下駄箱げたばこへ置いておいたら靴くつがなくなってしまうからです。
稲いねわらというものでつくった靴くつをはいた人もいました。

私わたくしは米作農家の子でしたから食べることにほそれほど苦労しませんが、畑作農家の
人や農家でない人は食べる物に苦労しました。畑作農家の
人は、お米を食べられませんでした。カボチャやイモ、ト
ウモロコシを炊たいて、それを先に食べて、おなかなかがふくれ
た後にお米を茶わんに少し食べるだけでした。しかし、お
なかなかがふくれただけまだましで、農家でない人はさらに食
べるものがありませんでした。それで、だんごをみそ汁しるの
中なかにわかった「すいとん」がはやったのです。

学校では戦争の中心に教えられましたので、物心
ついたときから軍隊はあこがれの的まととなりました。兵隊に
行って国のためにつくすのを当たり前あたりまえと思っていました。
中学二年生のときに太平洋戦争が始まって、軍事教練ぐんじきょうれんは
激はげしくなる一方でした。軍人勅諭ぐんじんちよくゆを暗記して発表し教官
にほめられました。英語は、敵国語てきこくごとして禁止きんしされていま
したので、野球をするのにも、ストライク・ボールなどを

○軍事教練 軍隊で行う
戦闘のための訓練。
○軍人勅諭 明治天皇か
ら陸海軍人に与えられた
勅諭（天皇の下した諭
告）。軍隊の教育はこれ
を基礎として実行され
た。



野球

イメージ図

○弔辞 死者を弔い、遺族を慰める気持ちを表した文章。

○特攻隊 特別攻撃隊の略称。特に太平洋戦争中、体当たりの攻撃を行った日本陸海軍の部隊。

○治安 社会の安寧、秩序が保たれていること。

「良い球」・「だめ」など言い直していました。

戦死者の遺骨が帰ってくると、村で葬儀が開かれました。いとも戦死し、私は一度弔辞を読んだ経験があります。小学生でも弔辞を読むのです。

十六歳のとき、先生に「どうせ兵隊に行くのなら、早く行ってえらくなりなさい」と、少年航空兵になることをすすめられました。兵隊になって飛行機に乗ることにあこがれはありましたが、兄に「父一人では農作業の人手が足りない。俺は三年たてば帰ってくるので、それまでは父を手伝ってほしい。」と言われ断念しました。もし行っていたら、特攻隊として死んでいただことでしょう。兵隊に行かなくてすみ、幸せだったと思います。戦力温存のため操縦技術が未熟な少年航空兵が一番最初に特攻を命じられたそうです。

戦争が終わりました。戦争は終わりましたが、生活はすぐには楽になりませんでした。食べ物がない状況はいぜんとして続きました。治安も悪くなり、なかなか暮らしはよくなりませんでした。

戦争というのは大変なことなのです。兵隊だけが大変ではないのです。国民みんなが大変になるのです。食べ物がない、着る物もなくなる、はき物もなくなる。ですから、戦争は絶対にしてはいけないということをつくづく感じています。

いつまでも戦争のない楽しい平和な毎日が続くように、みんな協力し合ってほしいのです。みんなが努力していつてほしいのです。これが私からのお願いです。

DATA

平成20年度厚別区平和事業
聴き取り
・平成20年8月2日
厚別南児童会館
・平成20年11月18日
大谷地東小学校



岩滝明夫(いわたき・あきお)さん

- ・昭和2年(1927年)生まれ
- ・札幌市厚別区在住